

鉄砲史研究 第1号

種子島伝来銃についての考察

所 莊 吉

ポルトガルの東方進出史

有 馬 成 甫

昭和43年6日
銃砲史学会編

鉄砲伝来の意義及び年時について従来数多くの発表がなされているが、初伝の銃そのものについてはあまり問題にされていない。これは資料が乏し過ぎるのがその理由であつたろうと思われる。その為殆んど無比判に初伝の銃をしてポルトガル製と考へ、甚しきは直接ポルトガル本国との接触が行われたとの誤解が今なお払色されていない。しかるに昭和三十九年朝日新聞紙上で飯塚浩二氏か初伝の銃は西洋系ではなく、トルコ系ではないかとの問題を提起された。飯塚説の骨子は、和銃の火挾が前方へ落ちる点に注目され、これと同様の形式は、趙士禎の著わした「神器譜」に所載された魯密銃に見られ、ヨーロッパの銃の火挾が手前に倒れる違いから、ポルトガル製と伝えられた初伝銃は、ヨーロッパ系ではなくポルトガルから日本へ来る途中で入手したトルコ系の銃ではなからうかということである。

たしかに初伝銃がポルトガル製ではないのではないかということに疑問を持ったことは面白い見方であるが、和銃とルーム銃との違いに大きな点がいくつかあることを見落されているようだ。例えば和銃では火挾の位置が側面にあり、開放時には倒れていて引金とは別の部品になっている。昭門の位置は火皿より前方にあり、殆んどがオープンサイトになっている。また銃床は短かく頬付で射撃をするようになっていて。特に重要な違いはその点火機構が急速点火式になっている。

それに比べてトルコ系の銃では、火挾の位置が銃の中央にあり常時起き上った状態にあり、引金とは同一部品であるS字形式である。照準具は銃身後端にあつてピープサイドが多い。また銃床は長く現代銃のように肩付で射撃を行うようになっていて。点火様式はスローダウン式で、最も初期の火繩保持具から多少進んだ程度である。

「神器譜」の中でターバンを巻いた人物がルーム銃を发射するのに支銃具を用いているが、和銃では使用されることはない。

以上の比較でも判かるように類以点は火挾がたゞ前方に向いていることだけで、多くの重要な点ではあまりにも違いが多い。むしろ火挾の方向だけの問題ならばヨーロッパの火繩銃の中にも前方に倒れるものが少なくない。これによつても飯塚氏のトルコ銃日本伝来説は根拠の薄いものとなる。

それならば日本へ伝わった銃はどこから来たのかということになるが、まず東方への伝来の経路が二つあったと考えたい。一つは陸路によるトルコイランインドを経て中国に入った魯密銃の系統である。その理由はこれらの径路にある国々の銃が多少のローカル色を除けば機構的に全く同一のものと云えるからである。

今一つは海路によつたものである。ポルトガルの東方進出基地である、ゴア、マラッカ、モルッカ諸島等を経たもの、この径路による火繩銃はあまり知られていないが、当時のマラッカ基地の勢力範囲であつたマラヤ及びジャヴァ地方の銃の特徴は和銃に似ている点が多い。特に点火機のアクシオンは和銃のそれと完全に同一で、トルコ系やヨーロッパ系の銃には見ることのないもので、後述する種子嶋初伝の銃との比較では一層はつきりとしてくる。

ここで問題になるのは、なぜポルトガル本国を始め他のヨーロッパ諸国の火繩銃と、和銃やマラッカの銃が類似していないのであろうかということであるが、そこでまず点火装置について考えて見ると、トルコ系銃やヨーロッパ系統の大部分はスローダウン式であることは先に述べたが、この機構かアジアで発明されたというよりも、むしろスペインで開発されたミユクレット式点火機の撃発機構を以ていること、即ちコックを落すのに松葉形の外部パネを用い、カニ目によつてセットが行われることから見て、まづ火繩銃の機関に

従来のスローダウン式が改良されて急速点火機が考案されたが、その着想は同時に新しい点火法であるミニクレット式燧石機に移され、火縄式としては過度期の作品がわずかに作られたのみで、これが東方へ運ばれマラッカ地方で倣製されるようになったのではなからうか。つまりヨーロッパでの急速点火機はマツチロツクからミニクレット式燧石機に移る極く、短かい期間に生まれ忘れ去られたものであると推測される。

また銃床が短かく、頬付になっているのはスペイン形ストックと呼ばれ「神器譜」の中でも高い所にいる鳥を打つには肩付より良いと書かれているように、狩猟用の銃としては当時ヨーロッパでもしばしば用いられたものである。

性能上の比較では安全性は落ちるが、命中度は急速点火機の方が良いのはいうまでもない。戦争等群衆の中で操作するには安全性が要求されるため、スローダウン式の肩付銃が好まれるのはその目的に応じてである。

以上までで銃砲の東方伝流には二つの経路があること並びにその違いを述べて来たが、種子嶋に渡来した銃がこのいずれであるかということであるが、種子嶋時堯がポルトガル人から入手した二挺の南蛮筒は「古郷」「腰さし」と呼ばれて秘蔵されたが、明治一〇年の兵火で焼失したといわれる。しかし南浦文之の「鉄砲記」や元和奥書の津田流伝書では一挺の南蛮筒を津田監物に贈ったと記され、種子嶋家には一挺しか残らなかつた筈である。事実種子嶋家の^{付券}寶物帖とも云うべき「種子嶋記」によれば、南蛮筒は「古郷」一挺のみしか記載されていない。

現在種子嶋家には二挺の筒が所蔵されている。勿論初伝の筒は西南役の折失われたが、旧臣西村天因博士が祖先織部丞がポルトガル人から贈られたという南蛮筒を旧主に献じたもので、「種子嶋家譜」の明治十一年二月十五日の項に「西村時彦、鉄砲一挺を献ず、初め天文十二年南蛮人鳥銃を法性公に献ずるや、時彦

の遠祖西村織部正も亦一挺を獲たり、去歲の戦に公室の藏する所は兵火の為に焼かる。(明治十年六月二十四日)時彦之を開き、乃ち己が家に藏する所を献ず。

本来は銃身のみであるが、新しく薩摩筒式の銃床や金具を作って復元をねらったのが、原形とは違つてちぐはぐな銃が出来上り、かえつて疑問を生む結果になった。

この銃身は全長六九二ミリメートル、口径一七ミリメートル(七匁五分玉)で肉厚は三ミリという和銃では考えられぬ薄いもので、坪井九馬三博士が「鉄砲伝来考」の中で「火門は真鍮製にして、其形方篋の如く、銃身は鑄鉄製の細長き筒より成り、螺旋形の鉄栓を以て、其底を塞ぐ。之を検するに、模型に鑄鉄を鑄込みて、鑄抜きたるものにて云々」とあるが、安齊実氏との共同調査の結果では鍛造品であつた。もし鑄造であれば三ミリ弱の肉厚では銃身が破裂して使用に耐えるものではない。また火門も鉄製で、坪井博士が鑄型の痕と思われたのは裝飾的に銃身に筋立がなされたものである。また上面には銀及び真鍮でエキゾチックな象眼が五ヶ所あり、柑子は丸く鐘状になっている。全体として和銃とは違つた雰囲気をもっている。残念なことには、記号も刻字もないが、相当の時代を経た銃身であることは間違いないが、八板家藏「鉄砲之巻」及び「種子島記」の記載とは異なる為初伝銃と同一のものではない。

今一挺の銃は形こそ異風であるが和製らしい感じを持った銃で久しく八板金兵衛清定作として著名な銃であつたが、特に種子島時哲氏の好意によつて分解し、鑄を落したところ「種子島住定堅」という銃工銘が刻まれてあつたことから、安永年間の種子島鍛冶平瀬新七定堅の手になるものである。

伝来後二百年もたつた安永年間に通常の種子島筒(薩摩筒とも呼ばれる)とは異なる形の銃を製作した経過についての資料はないが、初伝の「古郷」は次の如きもので、

南蛮筒

号古郷

- 一、筒長二尺三寸五分筋立芥子口
- 一、筒上面三所に金にて梅花の目印有
- 一、前盤目当真鍮
- 一、先盤目当惣銀、露なし
- 一、板金、火挾、毛拔真鍮、彫唐草模様
- 一、手、火蓋、雨覆、引金、用心金、板金留釘、用心金留釘真鍮
- 一、筒留釘三所
- 一、矢の本金物鉄、末真鍮
- 一、台木黒く理目竹の如く木木の名相知不中明候
- 一、台尻裏の方に楷字にて故郷の二字彫付これ有候
- 一、えふご一つ
- 一、藻玉

略

右天文十二年癸卯八月南蛮船渡来の節船頭喜利志多陀孟多牟良叔舎と申者島主左近將監時堯に贈申候鉄砲にて御座候「種子島記」
とあって、定堅作の銃は全く同形同寸である。恐らく鹿尾島郷に「古郷」を保存し、その忠実なレプリカを種子島の居館に置いたのである。

この「古郷」模製銃が、因友や堺の銃と違うだけでなく、地元の種子島で一般に製作された薩摩筒とも異った形をしていることは、初期の倣製が「古郷」によらず、今一つの伝来銃である「腰さし」（詳細不明な

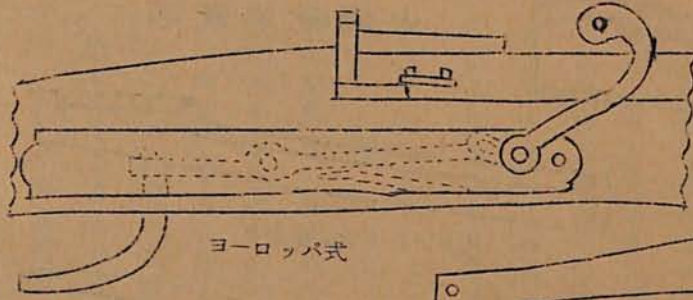
るも云葉から推して馬上筒かとも思われる)によつたからなのか、或いは日本の地方色の現われなのか明確ではない。同様式の銃は他に徳川美術館の南蛮銃(長二米位、新村出博士は英国製ならんと推定されている)位である。

さて「古郷」と一般の和銃との違いであるが照門がやゝ後方に位置すること。毛抜全の形が少し変わっており、関金が地板に付され、胴金が切れ鋸止になっている位で、機構的には変つた所がなく、三百年に及んで伝来時の銃と同じものが製作されたことが明らかである。

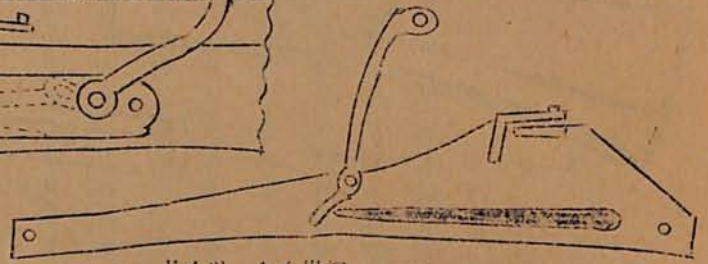
ここにおいて、天文十二年に種子島に伝来した銃は「種子島記」並びに堅作の模製銃によつてその形態を知ることが出来、またその製作地は、ヨーロッパでもトルコでもなく、ポルトガルのアジア基地のいずれかであつて、多くの資料によつて論ぜられた伝来時のいきさつから考えればマラッカがそれであるとするのが至当であろうと思われる。

※伝来の経過については有馬成甫博士の「火砲の起原とその伝流」を始め多くの論文が発表されているから参照されたい。

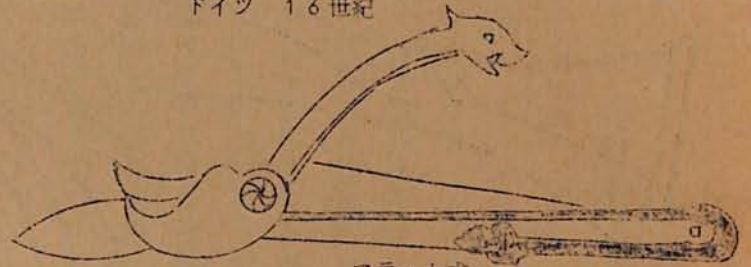
火繩銃の機関部



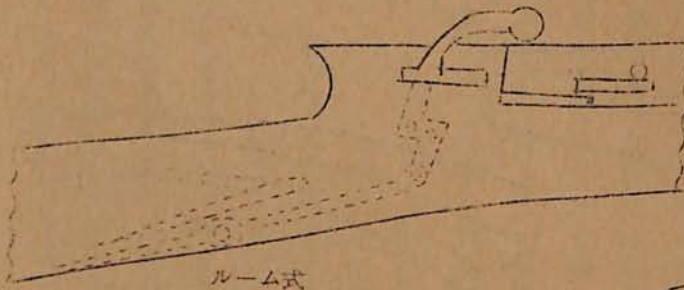
ヨーロッパ式



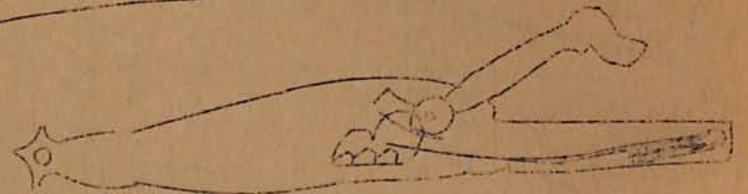
ドイツ 16世紀



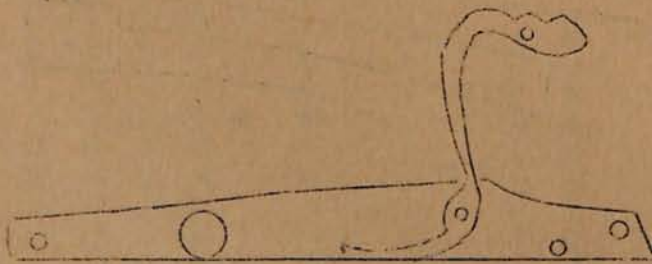
マラッカ式



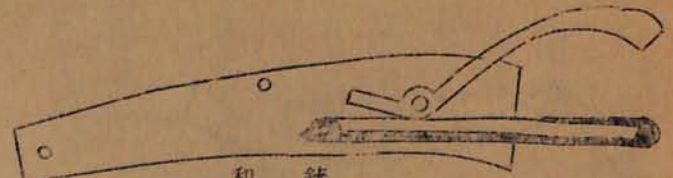
ルーム式



「古郷」

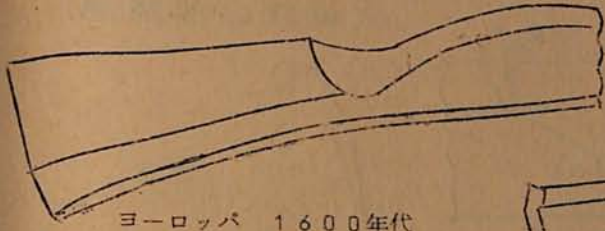


ドイツ 16世紀

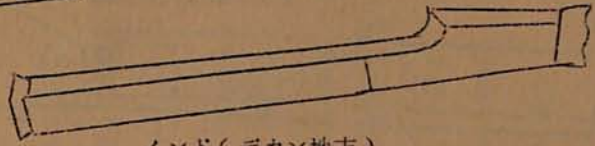


和銃

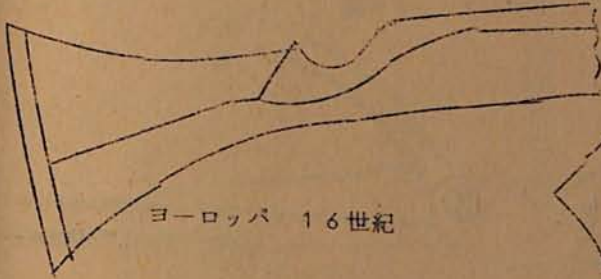
火縄銃の銃床



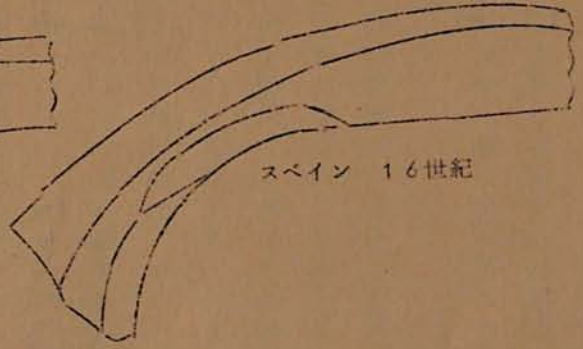
ヨーロッパ 1600年代



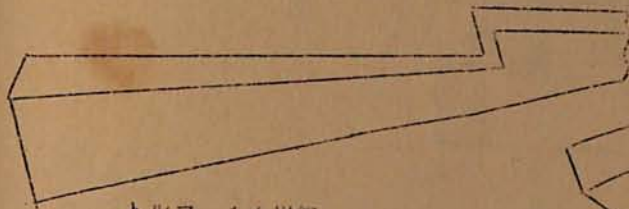
インド(デカン地方)



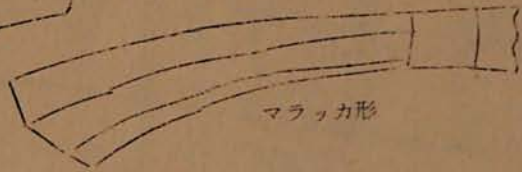
ヨーロッパ 16世紀



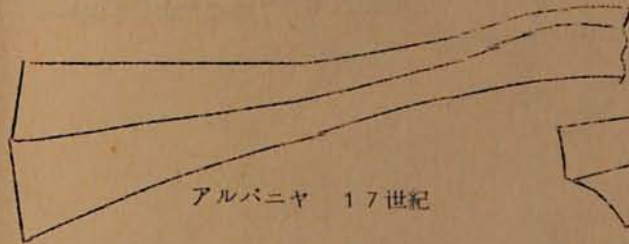
スペイン 16世紀



トルコ 16世紀



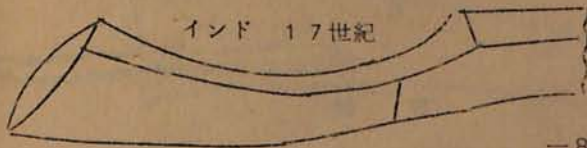
マラッカ形



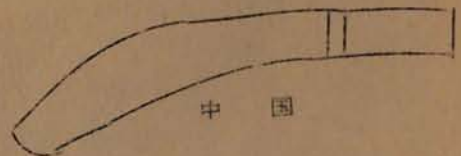
アルバニア 17世紀



和銃



インド 17世紀



中国

ポルトガルの東方進出史（其一）

有馬成甫訳

はしがき

日本への鉄砲伝来は、一面に於ては、日本が西洋近代科学に接触するの途を開き、所謂日本近代化の緒をなしたものであるが、他面東洋諸国をして白人の跳梁に委かせ所謂その植民地従属国を作るに至った過程をなしたものであるから、われら銃砲史を研究せんとするものは、その明るい一面を見ると共にまたその暗い方面をも看却せず何故にまた如何にしてヨーロッパ人が世界的発展を遂げたかということ物語る最初の機縁となったポルトガルの東方進出史を注目しなければならない。

この研究は語学の關係で専攻し得る範圍が極めて限られて居る關係で、私は寧ろ英国の東印度会社が、ダンプースをして編纂せしめた「印度に於けるポルトガル人」*Portuguese in India* (Vol. London, 1894) に依ることが捷徑であると思うので、これを抄訳して紹介することとしたのである。

序 説

人類最初の文化はオリエントに發祥した、この地メソポタミヤに於ける文明の曙光は、紀元前四千年頃から認めらるるという。

なぜこの地方に早く文化が開けたかということについては、普通メソポタミヤを貫流するティグリス・ユーフラテの両河が肥沃な灌漑地を提供し、而も氣候が温暖で農産物が豊富であったからだと言われている。然もこのような地理的条件は独りメソポタミヤ地方のみでなく、エジプトのナイル河流域やインドのインダス・ガンジス両河の沿辺、または支那の黄河及び揚子江流域などにもあって、それらの例は一、二に止ま

らない、それらは各その文化圏をもって発展したのであるが、何故にメソポタミアの文化のみがそれらに一歩を先んじたかということについては、単に農業文化の条件だけでは説明が出来ない、必ず他の条件があったに相違ないと考えることが自然であろう。

エジプトを含めたオリエントの世界的地位を見ると他の原始文化圏と異なった点は、それが東西両洋の交通の要衝を占めているということである。

凡そ文化の向上発展には、他民族文化との交流ということが必須の条件であつて、一民族が孤立隔絶した文化を持つていても、それが向上発展を遂げたという跡が見られないことは、歴史の示すところである。

逆に東西交通路の要点に位置し、周囲の多くの民族との接触が行われていた、メソポタミア地方のような情況にあつては、それが他に先んじて高度の文化を持つに至つた条件を具えていたと言ふことが出来よう。

この東西の交通貿易は、大きな富を齎らした。紀元前二千年頃には、既に絢爛たる文化圏を創くりバビロニアのハムラビ王朝の豪壮な王宮には東方よりの珍器宝玉を以て満たされていたと伝えられている程の富と文化との根底をなすものは主として東西貿易によつて獲られたものであつた。

この富と繁栄とは、やがて周囲の民族よりの侵入を受ける誘引となつたのであるが、その富の實質は、東西交通貿易権というべき一種の流動的なものであつたから、爾後中近東を指す争奪の所謂「中原の鹿」は主として貿易の中心市場を何処に設けるかということに向けられた。

ペリオンとニネベの繁栄は、実は印度よりの交通貿易路がベルシャに入り、西に航してパソラ附近に上陸しこの地を通過して地中海への途に當つていたからであつた。

然し紀元前十六世紀頃からエジプトの影響が始まり紀元前十世紀にタビデ王及びソロモン王を相継いで載いたイスラエル王国が勃興し、且つ俄かに活発な発展を見せたフェニキヤ人が地中海東岸に有力な都市国家

を建てるようになって東方貿易路に変化を見るようになった。

その頃、海上貿易に従事していたのは、印度洋ではアラビア人、地中海ではフェニキア人であった。

この両海上貿易路を結ぶために、ペルシャ湾と紅海とは常に競争の姿勢にあったが、フェニキア人が建てたツロ (Tyre) 及びシドン (Sidon) の両市を地中海貿易の中心とする為めに、フェニキア人はリノコルター (El Arish) を年に入れた。

これは印度洋と地中海とを結ぶ最短距離であったから印度洋の貨物を紅海に入れ、陸揚してツロに運搬するに運搬費と日子とを大い節約することが出来た。

ソロモン王もこの貿易に着目しエドムへの領土拡張を行いエラド (Elath) 及びエジオンゲベール (Ezion-Geber) の両港を開き、且つツロ王ヒラムの協力を得て、フェニキア人水先人の案内によりてアラビア人を使って、印度貿易をも行ったであろうと思われる。

フェニキア人は、この貿易によって非常に繁栄し、地中海沿岸到る処に植民地を作ったが、ツロのコロニーであるカルタゴは、その最も盛大な市場となった。

この地中海南部に、勢力を張ったフェニキア人に対するに至ったのは、エーゲー海文化を持ったギリシア人で、紀元前八世紀頃から互に接触するようになり、紀元前四九二年から四七九年に亘る三回の戦争によってペルシャを破ったギリシアは、その勢力と文化とに於て躍進的な発展を遂げた。

ギリシア文化を背景としたマセドニアが興りアレキサンダー大王が起つてシリヤ・エジプト・ペルシャ・印度を征服し従来フェニキア人が握っていた東方貿易をその手より奪う為めシドンの市を占領しツロ市を破壊して新たに地中海の東方貿易港としてナイル河口にアレキサンドリヤを建設した。

そうして印度遠征によって急激に増大した東方貿易のため印度の貨物をして紅海に入らしめ従来アカバ湾

に入港していたものをスエズ湾へ向はしむるようにした。

アレキサンダー大王（前三三六—前三二三）は印度征服後僅かに一年で死んだが（前三二三）世界の市場としてのアレキサンドリアの商業的地位は揺るがず、通商、製造業、農業、航海術の進歩によってその繁栄は益増大した。

アレキサンダー大王の没後、エジプトの政權を握ったトレミー・フィラデルフスは、アレキサンドリアと競争的立場にあるツロその他フィニキヤ都市の復活を恐れ東方貿易の独占を確保する為め紅海のアルシヌ（Arsimoe スエズの近く）からナイルの東支流ペルシアク（Perisaeo）迄運河—広さ百キニピツツ、深さ三〇キニピツツを作り、それによって印度の産物を水路により首都迄運ぶことが出来るようにした、その上紅海の西岸にベレニケ（Bereneae）市を建設した、これは間もなく繁榮して主要な貨物の集散地となった。

これによって東方よりの貨物はベレニケよりナイルの流れから三マイルのコプト市迄陸上を運搬し、そこで舟に積み換え運河とナイルの本支流を経てアレキサンドリアに運ばれ、そこから地中海沿岸諸港に運ばるようになった。この運河に依る東西貿易はその後二百五十余年も続いた。

ベレニケより印度に向う船は、アラビヤ沿岸に沿ってシロクロス（Sisiroptak）に至り、それより北上してペルシヤ沿岸に沿い、インダス河口のデルタにあるパッタ（またはHatta）市に至り、それより南下して印度の西海岸マラバル諸港に行くのであった。

尚おエジプトは艦隊を以てペルシヤ湾口を閉鎖したので、印度よりチグリシ・ユウフラテ河口に至る貿易路は遮断されてしまったので印度より北方へ向う印度の貨物は、インダス河口より川を溯り駱駝によってオクソス（Oxus）川に至り川を下ってアラル海に入らんとする処から西に転じて裏海に入りそれより更に黒

海に入つて歐羅巴に配達されたのである。

紀元前四世紀頃から、イタリアに興つたローマは、その勢力をシシリーに延ばさんとしてフェニキア人の戦争が起り、多年東方貿易を独占し、地中海の通商を掌握していたカルタゴとの間に紀元前二六四年から起つたポエニ戦争は、紀元前一四六年迄に三次に亘る継続戦で遂に海商国民の運命を閉ぢてしまった。

その後、紀元前三〇年にローマはエジプトを征服して之を属州 (PROVINCIA) としたが、東方貿易の市場としてのアレキサンドリヤの重要性は認識して、その貿易を続けたのみならず、その広大な国力を利用して益々その繁栄を大ならしめた。そこでローマ市民も印度の産物に対する趣味に親しむようになった。

紀元前六六年にローマはシリヤ及びメソポタミヤを征服したが、此頃はベルシヤ湾を通ずる印度貿易が恢復して、この通路に當つてゐるタドモール (Tadmor - Palmyra) は非常に富んだ市となつてゐた、そこでローマはこの経路による通商をも利用した。

ローマがエジプトを占領し、紀元八〇年に至る約一世紀間には、紅海を通ずる印度貿易の航路に殆んど何等の変化を示さなかつた、然し此頃この航海に多年従事してゐた船の指揮官で、ヒツパルス (HIPPARCHUS) という人が、印度洋、紅海及びペルシヤ湾等の氣象を親視し、季節風に規則正しい変化があることを知つて従来アラビヤ湾口より北上してペルシヤ沿岸に沿つて行く迂回航路を探ることを止め、この季節風に乗つて直線的に印度洋を横断し、ムージリス (印度西海岸の港) に至ることが出来るようになったので印度貿易に新生面を拓くに至つた。

この新航路発見によつて、印度への航海日数が短縮し、一ケ年で往復することが出来るようになった。その頃プリニーと云う人の書いたものに左のような記事がある。

アレキサンドリヤよりユリオポリス (Julio-Polis) まで二マイルある。そこで貨物はナイル河上の

船に積み込まれコプトス (Koptos) に運ばれる。そこ迄は三百三マイルあつて十二日を要する、コプトスから紅海沿岸のベレニケ迄は貨物は隊商によつて運ばれる、暑さの爲め行進は夜に限られ二百五十八マイルの巨離を十二日かかる、ベレニケで船積みをして夏の央ばに出発する、そうして三十日を要して紅海の入口のオケリス (Ochelis) (又は Oelja) 若しくはアラビヤのカネー (Kane) (又は Kasi - Farak) に着く、それから印度洋を横断して四十日後に印度第一の貿易港ムージリスに着く。そこをエジプトのチビ月即ちわれらの十二月に出港して帰途につく、印度洋では東北風に乗じ、アラビヤ湾に入ると南または南西風が吹くから、これによつて一ケ年以内に再びベレニケに帰港することが出来る。

それらのアラビヤ船が自ら印度のムージリスから更に南に航海を延長したかどうかは明らかでない、然し印度人が自らの船で互に貿易を行い、コロマンデル沿岸とマラバルとの交通並にバリガザの内地交易は期節にかかわらず行われていたから、ムージリス港には、いつでも多量の印度産物が集積せられていた。その上タブロバーン (セイロンの古名) の高価な産物もまたこの港に集まるので、エジプトの商人達は、ムージリス以外に行かなくとも充分の商品を入手することが出来た。

印度の事情については、ユスチニアマス朝 (五一八一—六一〇) 頃迄はあまりヨーロッパ人に知られていなかった。七世紀に或るエジプト商人で数回印度に往復したコスモス・インディコプレウセス (Kosmos Indiko-Plenses) の書いたものには印度の西海岸は主として胡椒貿易の基地であること。タブロバーンは大貿易市場であつて、そこには Sinae (支那) の絹や東方の価高き香料が集まり、そこから印度各地やペルシヤ湾及び紅海方面へ運ばるとある。またペルシヤが昔の活気を取り戻し、印度各地へペルシヤの

船及び商人が満ち満ちてペルシヤの物産と、印度の香辛料や寶石類とを交換し、それをペルシヤ湾を経てチ
グリス・ユーフラテによって国内に分配してゐることなどを記述してゐる。

然し七世紀にサラセン帝国が起りペルシヤ、エジプトを攻め、紀元七一一年西ゴート王国を征服してスベ
インにグラナダ王国を建設すると東西交通の様想は一変した。

カリフ・オマー（Omair 六三四—六四四）は印度・ペルシヤ貿易を掌握するため、その中心市場としてチ
グリス・ユーフラテ両河の交流点の下流にバスラ市（Bassora）を建設した、そこに東方物産を集積し、
そこからヨーロッパ諸国に分配するのであったが、この町は間もなくアレキサンドリヤに劣らぬ繁栄を示す
ようになった。

また地中海では従来ヨーロッパ各地への東方物資の分配基点であったアレキサンドリアの機能を停止し、
東ローマ帝国との交通を遮断した。

このため、ヨーロッパ諸国では、アラビヤ人の統制力の及ばない地方を通ずる新交通路を開いて、東方貿
易に対する一般の要望に応ずることとした、これが後に所謂シルク・ロードと呼ばれる交通路である。

支那の絹は陝西省で購われ、長安から隊商によつて某蘭・酒泉・安西・哈密を経て、天山南路を通りパミ
ール高原に出で裏海に依つて、更に黒海に入つてコンスタンチノーブル（東ローマ帝国）に達するものであ
る。

また印度の香料は、インダス河口から溯航してオクサス川下流の地点に至り、それより裏海に入り更に黒
海に運ばれてコンスタンチノーブルに至るのである。

この結果コンスタンチノーブルは印度及び支那物産の集積地となり、アレキサンドリヤに代つて、ヨーロ
ッパ諸国への分配基地となつた。

コンスタンチノーブルから地中海沿岸の各港（スペイン・アフリカ・イタリア等の）へ、貨物を運ぶ貿易事業に従事していたのは、ヴェネチア人とゼノア人であった、ヴェネチアはイタリアにヴァンダル・ゴートなどの野蛮人が侵入したときそこに住んでいたヴェネチアンバルデイーとして知られた住民が逃れてアドリア海のブレンタ河口に近い小さなデルタ島に難を避けて四五二年頃から建てた町である。彼等はその努力を商業に集中して、遂に十世紀の終りに独立してヴェネチア共和国を作った。

ゼノアは第二次ポエニ戦争以来ローマの地方区（*Municipium*）となり通商都市として有名であった。東ローマ帝国では、初めヴェネチア人が非常に活躍して東方貿易を行い巨大な富を獲得したが、十世紀になってコンスタンチノーブルの力が、えるとギリシヤより地方宗主権（*General Lordship*）を購入してヘラクレア・アドリアノーブル・ガリポリ・ペトラス及びデラゾの町々に勢力を延ばし遂に法皇アレキサンダー三世（一一五九—一一八一）から、アドリア海沿岸住民の支配権を与えらるるに至った。

ゼノアは十一世紀に十字軍が起ると、これに運送船を供給し、その行動に協力したためにヴェネチアの独占的商権を喜ばなくなったコンスタンチノーブルでは、その町の一部をゼノアに他の一部をピサに与えて、これと対抗せしめた、その結果ヴェネチア人は、コンスタンチノーブルを追わることとなった。

このためヴェネチア人が行っていた独乙地方の貿易は行われなくなって多くの都市が独立して直接コンスタンチノーブルと通商を開くようになり、それから北ドイツ沿海地方に至る交通路が開け、ヴィエンナ・ラチボン・ウルム・アウグスブルグ・ニュールンブルグなどの都市が連絡して商業的連鎖関係を結ぶに至った。コンスタンチノーブルを追出されたヴェネチア人は、南地中海に移り、アレキサンドリア及びロゼッタ港を中心として東方貿易を展開するようになり、そこを足がかりとして四方に通商路を開いた。

第一路は、コンスタンチノーブルへ、第二路はスペイン・ポルトガルへ、第三路はフランスへ、第四路は

フランスを経て、フランダースの首都ブルーズを通過し、英国オランダ等へ運搬するのであった。

ゼノアは東ローマ帝国の保護を受け、ガラタペラ等に植民地を作る特権を得、更に黒海の沿岸貿易独占権を握り、東方への隊商を持つようになり、発展したが、そのやり方が略奪的で、住民の反感を買ひまたビザンチン政府もヴェネチア人及びトルコ人の勢力を借りて排斥を企てた結果、地中海北部に於ける東方貿易は、再びヴェネチア人の手中に帰した。

然しオスマン・トルコが興り、一四五三年にコンスタンチノーブルを占領せらるるに至って、北方の東方貿易路は閉ざされ、その上ヴェネチアはロンバルデー・ロマニア・及びナポリなどと絶え間なく抗争を続けたため疲れ果て残されたアレキサンドリアを通ずる東方貿易路も、マムルーク王朝の手より、オスマン・トルコのセリム一世（五一二—一五二〇）の手に落ち閉ざさるることとなった。

これは独り、ヴェネチアの東方貿易に最後の打撃を与えたばかりでなく、ヨーロッパ人より東洋貿易を奪ってしまったのであった。

× × × × ×

上述のように印度の香辛料は、ヨーロッパ人に採っては古来より使用し慣れた、生活必需品であり、また支那の絹・陶磁器等も非常に魅力ある物資として、なくてはならないものであった。従つてこれらを齎らす東方貿易は、莫大な利益を生むもので、ヨーロッパ人に採っては殆んど死活の問題ともいふべきものであった。

そこで十四世紀にオスマン・トルコが興り、次で十五世紀にチムールが興つて中東地区を押え、東西貿易路を庶断したことは、ヨーロッパ人に非常な苦痛を与えることとなったのである。

此の苦境を打開するため、地中海の二つの海商民族—ヴェネチア人とゼノア人—とは各々別路を選んで印

度に達せんと欲し、前者はアラビヤ人と妥協し結合して印度洋方面に活躍し、後者は海上より新航路を拓かんとしてララゴン・カスチル王を動かして、コロンブスのアメリカ発見となった。

ポルトガルは別に一つの構想を律て、アラビヤを通ずる陸路と、アフリカ沿岸を南下する海路との両方面に探險隊を派遣した。そうして前者は目的を達せず終ったが、後者には、ヴァスコ・ダ・ガマが出て、新航路を発見したのである。

こうして一四九八年にヴァスコ・ダ・ガマが、カリクットの前に現われて以来は、東西交通の様想は以前とは全く一変したのである。

無断転載を禁ず